

## 平成 23 年度新潟精神医学会

日 時 平成 23 年 10 月 22 日 (土)  
12 時 45 分より～  
会 場 湯沢グランドホテル 2F  
「魚野川」

## I. 一 般 演 題

## 1 アセトアミノフェン過量服薬後に出現したせん妄が、一旦回復後に再燃したベンゾジアゼピン依存の 1 例

信田 慶太・鈴木雄太郎・折目 直樹  
染矢 俊幸

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
精神医学分野

【はじめに】せん妄の原因は、中枢性疾患、全身性疾患、物質による中毒あるいは離脱である。我々は、ベンゾジアゼピン系薬物（以下 BZD）依存の経過中にアセトアミノフェン（以下 APAP）大量摂取により入院し、直後より出現したせん妄が一旦おさまったものの、1 週後に再びせん妄状態に陥った症例を経験したので報告する。

症例は 42 歳、男性。

【現病歴】X-7 年頃より仕事上のストレスを機に抑うつ的となり、X-5 年に A クリニックを初診して以来、BZD を常用するようになった。X-1 年以降 BZD の使用量が増え、他院から似た内容の抗不安薬、睡眠薬を処方してもらっていた。

X 年、復職が決まると抑うつ気分やイライラが増悪した。復職前日、APAP37.5g 相当の市販薬を大量服薬し、当院 ICU に搬送された。

第 3 病日より失見当識、奇行を認めたため当科を紹介され、医療保護入院した。第 10 病日にはせん妄状態を脱したかに見えたが、第 18 病日より再びせん妄を認めた。原因検索を内科、神経内科に依頼したが、相当する疾患は見つからなかった。せん妄消失後、一か月程観察し、退院した。

【考察】過量摂取 2 日後より肝機能障害が出現し、3 日後にせん妄が見られた経過から、1 回目のせん妄は APAP が関与していると考えて矛盾はない。一方、BZD 離脱せん妄の発現時期としても矛盾せず、二つの要因が重なったことでせん妄が生じたのかも知れない。

2 回目のせん妄は評価がより難しい。一般にせん妄で見られる意識変容は動揺する傾向にはあるが、1 つのせん妄エピソード中に症状が 1 週間消失していたという報告は聞かれない。可能性として以下を考えた。

- ①医療者からの観察で確認されなくなっただけで、最初のせん妄が治癒していなかった。
- ②最初のせん妄は BZD 離脱によるもので、その後 APAP による中毒作用が遅発性に出現し、新たにせん妄状態を呈した。
- ③その他に身体疾患を併発していた。

①の可能性は否定しきれないが、BZD 離脱、APAP 中毒ともにせん妄が 1 ヶ月持続したという報告は見られない上、入院環境下で 1 週間症状を確認されずに経過する可能性は低い。②について、APAP による中毒症状の出現は通常 24 ～ 72 時間後であり、18 日後に発現したという報告はない。実際、本症例の肝機能障害は摂取 2 日後より増悪し、18 日後には改善しつつあった。③については、せん妄を引き起こし得るような身体合併症は確認されていない。

【まとめ】一連の経過について、十分なエビデンスを以て説明することは出来ないが、BZD 長期大量常用の患者が APAP 中毒を呈した場合、通常よりも長い観察期間が必要かもしれない。